

都護に代つて、邊境防備の必要からとは言え、今や兵馬・財政・民政の三權を一身に掌握した強力な武官の登場を意味するからに外ならない。況んや、その中には異民族、殊に武將として才幹のある北族出身者が少なくなき、麾下の軍隊にも多數の異民族・北族が含まれていたとすれば、表面上は開元・天寶の盛世であり、唐藝術文化の爛熟期であつた玄宗の治世も、實際には甚だ危険に瀕していたと言わなければならないが、果せるかな、彼が政治に飽きて享樂をこととした天寶の末年（七五五年）に至つて平盧・范陽・河東三鎮の節度使を兼ね、非常な勢力をもつていた營州の雜胡安祿山、及びその部下の突厥人史思明の叛亂、いわゆる安史の亂の勃發を見、この事件を界として唐王朝は没落の一路を辿ることになつたのであつた。

唐王朝没落の原因としては、安史の亂を契機として、一段と強化されるに至つた異民族の壓迫、特に唐の西域經營に終止符を打つた吐蕃勢力の發展や、八世紀の前半突厥に代つて漠北の霸權を握り、次いで安史の亂に唐室を援けて以來約一世紀の間、その功を恃んで横暴を極めた別派のトルコ族回鶻（ウイグル、Uighur）の跳梁、禁軍（近衛軍）の力を借りて政權を掌握し、天子の廢立さえ自由にした宦官の專横、安史の亂以後廣く内地にも設けられ、完全に軍閥化するに至つた節度使の跋扈などを擧げることができらるであらう。しかも安史の亂以後、唐王朝がなお十餘代・百數十年の長期に亘つて、その命脈を維持することができたとすれば、それは國都長安に近く天府と稱された蜀や、米作地帯であるばかりでなく製鹽地帯としても重要であつた江淮地方、或は南海貿易の中心として、その頃世界第一の貿易港であつた廣州——サラセン人のいわゆるカンフ（Khanfu）——などのような、財源地帯がなお唐室の有であつたからに外ならない。しかるに、九世紀の後半、僖宗（キソウ）即位の翌年（八七四年）山東に